

総括質疑・討論(沖縄大会「アジアのなかの琉球」)

著者	高良 倉吉, 田中 真之, 豊見山 和行, 梅木 哲人
雑誌名	沖縄文化研究
巻	25
ページ	69-113
発行年	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015844



座談会出席者

《総括質疑・討論》

高良 第一部では四名の先生方に、それぞれのご専門の立場から報告をしていただきました。四名の先生にさらに御三方に加わっていただきまして、討論を始めたいと思います。自己紹介代わりに三名の方々には、まず、第一部の四人の先生の報告を聴いての感想、もしくは今日の討論で話したいことや、近世琉球に関する認識の仕方についてのご意見などについて、全く自由で結構ですのでお話しください。

梅木 本日は、「アジアの中の琉球」というのを掲げてあるわけですが、この問題を私流に考えますと、日本をアジアの中で考えるということだと理解しています。琉球というのは、日本をアジアの中で考えるという場合、まさに奇跡的な存在、

非常に貴重な存在であるということだろうと思います。しかし、その点については必ずしも日本の中で、十分に認識されていない面が強いと感じているわけです。それで、この琉球の重要な意味というのは何かと言いますと、前近代の場合で言いますと、キーワードはやはり冊封、朝貢だと思います。琉球の朝貢、冊封ということを考えることで、逆に日本を含めたアジア世界の国際関係や国際社会とこのが見えてくるということだと思います。

この琉球の冊封、朝貢についてはいろいろな難しい問題がございます。その点はちょっと言及できませんが、この琉球の朝貢、冊封ということを考えると、それと並行して日本の朝貢、冊封という問題が浮かび上ってくるわけです。別な言い方をしますと、日本の室町時代の、高等学校の教科書などでは勘合貿易というような形で言われていますけれども、日明関係。これはやはり朝貢であります。そして、はっきりと研究のうえで規定されているのかどうか勉強不足なところもありまして、私自身十分に理解できていないのですけれども、日本の足利義満は冊封されていると見ていいのではないかと考えています。日本の場合、中国との関係、冊封というのはその後ずっと推移していきますが、その後ぐちゃぐちゃになっていくと言いますか、戦国時代、倭寇の時代になっていきます。

そして、秀吉の朝鮮出兵という時代になります。この朝鮮出兵については、これも今までいろいろな研究の蓄積がありまして、いろいろ言われているわけですが、朝鮮の人々に対して侵略したという、そういった側面で語られる場合が多いわけです。けれどももう少しアジア全体の中で考えて

みた場合に、これは日本の中華世界からの自立と言いましょか、分離と言いましょか、日本の中華世界への挑戦、そういった意味合いがあり、日本をアジア世界の中で考えるということに関しては非常に重要な意味を持っているのではないかというふうに考えているわけです。

それから、徳川政権というのは秀吉政権を引き継ぐ形で成立しているわけです。基本的には鎖国政策というのは中国との関係で、中国からの分離の形を示しているというふうに思うわけです。それで、その徳川政権が中国に対する対し方、あるいは自分をアジア世界の中で表現する表現の仕方、そういったものを考えてみます場合に、先程紙屋先生のお話にもいろいろあったわけですが、自分自身をいろんな形で表現するわけです。日本国王であるとか、大君であるとか、表現しているわけです。大君は、朝鮮に対する日本の分離と言いましょか、日本を別にする、そういった意識。これもまた中国という背景を考えてのことだろうと思います。

こういった自己表現というのは、かなりある意味では混乱しているのではないかと思います。果たして鎖国政策というのを取りながら日本はアジア世界の中で、自分自身を中華世界に対峙する一つの体制として形を作り得たかどうかということは、非常に疑問に思います。というのは、その源流になっていることは、秀吉の時代、さらに逆上って室町時代にあるというふうに、私は考えています。

例えば室町時代の仮名書きの琉球世主への書というのがございます。これは室町將軍から琉球世主への書です。当時の室町將軍にとって、琉球というのはいわば外の世界です。琉球は中華世界、冊封

關係を結んでおりまして中華世界の一員、有力な一員をなしていたわけですが、そこに対する仮名書きの書簡。仮名書きの書簡というのはこれもいろいろ言われておりますが、私自身は女房奉書といった文書の形式ではないかと思っているわけです。これは、天皇に近侍する女房が外へ出す消息文の文書の形式ですけれども、そういったものを室町將軍が琉球の世主に対して、つまり外の者に対して出しているわけです。何か十分に国家として形式化されていない。これと対照的に、中華世界では例えば「表」、平行文書として「咨」といったような、非常に明確な文書の形式があるわけです。琉球もそういった中国の文書の形式を厳密に守って、それで冊封關係というのは維持されているわけです。そういったものに比べてあまりにも貧弱と言いましようか、できていないように思います。徳川政権はそういったところをずっと受け継いできているのではないかという気がするわけです。

こういったことを考えまして結論的に言いますと、室町時代の末ごろから日本が中国の冊封制からだんだん分離していった結果、アジア世界は中国を中心とする世界と、それから日本という二極ができたのではないか。しかし日本は一つの極としては十分な体制をつくり出しえなかったということですね。そしてこのことと関連して日本のほうは、これも唐突ですけども、非常に軍事専制国家という形でできあがっている。こういった考えをもった背景には、日本史の二分法という時代区分の仕方新しい考え方にヒントを得ているところがあります。

日本史というのは今まで、古代中世あるいは平安時代とか鎌倉時代とか、こういった時代区分がご

ざいますけれども、それではなくて二つに別れる。つまり一つは古代国家。律令体制を基本的に維持しているような体制。もちろん変化はずつとありますけれども。もう一つが近世国家。これは自前の国家と言いましょか。こういった見方は、尾藤正英先生の『江戸時代とはなにか』（岩波書店一九九二）という本に書かれております。琉球の朝貢・冊封関係、日本の中華世界からの分離というのは、二分法の後半のほうの問題だと思っているところです。そういったことで、琉球をとり上げるということは、琉球だけではなくて、まさに、日本のアジアの中での位置が分かるという、そういったことが今日のお話を聞いていて私自身ずつと考えていたことであります。

もう一つちょっと申しますと、アマンダ先生の布の問題ですけれども、絣が沖縄、日本に入ってきて、宗教性が薄められたということですが、絣は沖縄に入ってきて来て、すがすがしいデザインのものになっていくということを絣を研究している先生からお聞きしたことがありましたが、非常に納得したような感じです。それとともに布の素材としての麻、綿、そういったものがどうかということになりますと、やはり中国との関係が問題になると思います。

実は、十五世紀ごろから琉球の進貢、明朝に対する進貢というのは、非常に困難を極めてきます。これは船が不足してくる。元々進貢する場合には中国から下賜された船を使っていた。明代の話です。清代はちよつと違つてきますけれども。その船がなくなつて、手足がもがれたようになり、琉球は非常に困難な状態になってきます。それと見合う形で、琉球における布の生産というのが出てきて、そ

れを貢物として中国に持っていくようになります。「土夏布」という形で出てきます。だから、そういった冊封下の琉球と中国との関係というのが混乱し低下してくる。それは全体的に、アジア世界の変化でもあると私自身は思っていますけれども、それに刺激されて逆に琉球の中で、この「土夏布」の生産ということが出てくる。多分そういったことも、絣の技術などの向上というのも重なっているのではないかと思います。その「土夏布」は日本に対しても当時琉球国王の贈答品として使われていまして、日本の資料では「太平布」という言葉で出てきます。そういったことで、やはり、アジア世界の大きな変化の中でそういったものも、出てきているのではないかと感じていた次第です。

田名 今日では四人のご発表を聞かせていただきまして、大変多くの話題を提供していただいたと思っています。スミツツさんの蔡温の話も、沖縄の中で話されている蔡温とはまた一味違う話で、この討論を通じて、さらに別なお話が聞けるのではないかと楽しみにしております。アマンダさんの絣の話もそうですけれども、我々は沖縄の中だけで考えがちというところがあります。アジア、東南アジアの話などはよく話題にはなるのですけれども、そのあたり、さらには日本の中での絣の位置付け等々も含めて、また話を聞かせていただければと思います。真栄平さんは、進貢貿易の中身の話をしていました、私としては、真栄平さんと紙屋さんの話というのが、私自身の専門と一番近いところで、そのあたりが最も興味があつたわけですけれども、実に斬新な切り口だと思いました。その点にちよつと触れたいと思っております。

今回真栄平さんは近世後期、十八世紀、十九世紀というあたりの進貢貿易の話をなさいましたが、沖縄での進貢貿易の考え方、中国との関係については、本当にさまざまなことが言われてきたわけです。いわゆる古琉球以来、今日は近世の話が中心になるようですけれども、貿易の話を抜きにしては古琉球は語れないほど、大交易の時代がずっと注目されてきたという側面があります。

そして、近世においてもそれは確かにありまして、ある意味では貿易の回数とか量とかをトータルに考えていけば、古琉球における貿易よりも近世になってから、つまり薩摩が入ってきてからのほうが、貿易というのは本当は盛んだったというような議論などもあるわけです。それでも従来行われてきた進貢貿易についての話というのは、ある意味では非常に総論的な話ばかりがずっと続いてきたというふうに思われます。

そういう中で、真栄平さんも取り上げて話されていたように、安良城先生が『新・沖縄史論』の中で「御財制」を用いて――「御財制」というのは言ってみれば琉球王府の国家予算書みたいなものです。その中で国家の財政というのがどうなっているのかというのを分析した史料ですけれども――そうした資料を通じて貿易の内実というものを説き明かされて（細かな材料は先程の真栄平さんの資料を見ていただければお分かりだと思います）進貢貿易は赤字だったという結論に達しているわけです。進貢貿易が近世に入って十八世紀の初頭にはすでに赤字に陥っていた。その赤字を補填していたのが砂糖の売上だった。砂糖を販売することで赤字を補填していたと言う話をずっとなさっていました。経

済的な側面で考えると赤字であった進貢貿易を、その他の政治的なものもろもろの要因でもって、進貢貿易が続けられたというような話を、安良城先生はされたわけです。

確かに「御財制」を分析してのそういうお話というのは、大変説得力のある話でしたけれども、そうは言われなくても、貿易というのが赤字で成り立つものかという疑問はずっと残るわけです。本当にそのとおりだったのかということがずっとありまして、そういうのは考えるだけでなかなか出口は見つからない部分があったわけですけども、トータルな話としては、赤字黒字の話はそこで一旦止まっております、その後の研究というのは別のところ具体的なところに今、動いている。いわゆる実態がどうだったのか。赤字黒字を言うためには、貿易の実態をもっと明らかにしなければならぬ、という方向に研究が進んでいると思います。

それと同時にそのための史料というのが、例えば中国の檔案館あたりから『歴代宝案』関連の史料として、どんどん出てくるという時代になっておりますので、その分析を通じてやっと具体的な中身の検討が始まった。いろいろな方々がそういう史料を用いて、具体的な貿易像、進貢貿易の中身を議論し始めたという時代に入ったという気がしております。

つまり、沖縄の歴史研究というのは、これまで総論的なものが圧倒的に多かったという部分があります。そして個別具体的な研究が、新たな分析を行なう形でやっと始まったという感じがしているわけです。沖縄の近世というのは、本当のところを言うところと意外とよく分かっていない。私に分らない

だけかも知れませんが。人口の問題にしても、生産高の問題にしても、結構分らない部分がある。いわゆる表に出てきている数字というのは、幕府向けだったり、薩摩向けだった数字が一人歩きをしているという側面があります。ある意味で先程の「御財制」にしたところで、表向きの史料という言い方もできるわけです。本当の実態を表した史料というのがどこにいったのかという気がとてもしてきます。

例えば、貿易の世界では密貿易などというのは本来は広範に行われているはずですが。薩摩などでも十九世紀に入ると随分出てきます。ところが、沖縄関係では密貿易の話というのはそれほど数多く出てくるわけではない。薩摩とか大坂とか、そのあたりで琉球経由の密貿易の話は出てきますけれども。沖縄国内ではほとんど出ない。そういうことまで含めて考えると、貿易を一つ取ってみても、まだまだ具体的な中身の話というのは展開されていない。これからやっていかなければならない余地というのは、多々あると考えております。その辺は歴史をやっている人間の一つの責任だろうというふうには考えておりますが。

それと、貿易などを論ずる場合に個別的な問題と、さらには総論とそういうところを行きつ戻りつをしながらやっていかなければならないというふうに思います。そういう意味では、たとえば経済的な面では、沖縄の国家財政といえますか、沖縄がどれだけの生産力をもって、どれだけの国家予算をもって運営されている国家だったのかというようなことを考えた場合に、その中で貿易がどれだけの

位置を占めたのかということを具体的な数字でもって実証していく。そういう分析・研究を考えなければいけないだろうと思っています。

沖縄経由で中国産のものが貿易を通じて入ってきて、島津などを通して、大坂市場などに流れていきますけれども、そういうことを考える際には、例えば長崎貿易―長崎貿易は随分研究されているわけですが―そういうものの、数量的な比較なども含めて考えていく。そうすることによって、もっとトータルな沖縄史像と言いますか、沖縄にとつての貿易、日本全体の中で沖縄の占めていた位置とというのもよく分かっていくだろうと思います。それは輸出する側である中国との問題もちろん絡んできます。そこまで広げていって、アジアの中の琉球、日本の中での琉球というのを、もっと考えなければならぬと思います。

それから、沖縄の歴史の流れを考えていきますと、先程の紙屋先生のお話もそうですけれども、主体的に、沖縄側が、沖縄の進路をどういう形で選択しながらここまで進んできたのかを考えた場合に、主体的であったのか、それともそういう時代に対応して、対処的に動いてきたのか、という部分があります。もちろん時代とのからみでそれぞれ琉球側はその時々の方角を決めているわけですが、その中で何が主体的で、何がそうでなかったかということも含めて、沖縄の歴史を考える場合には、その見極めも必要になってくるというふうに思っております。

豊見山　私は、今回のシンポジウムのことを念頭に、これまでの研究史を少し洗い直してみようと

思います。今日の紙屋さんのご報告でも、日中両属論にいくつかの側面から指摘がありましたけれども、その日中両属論には問題があると私は考えています。まず、近世の琉球をどういうように研究史上位置付けてきたかということをごつと振り返ってみますと、例えば伊波普猷は近世の琉球は薩摩の傀儡、操り人形であると位置づけています。貿易をするための一機関、一つの単なる操られた存在に過ぎない、というような非常に他律的な位置付けをしていたわけです。それは、実証主義者といわれた東恩納寛惇もほとんど同じ認識を持っていたことが、全集を調べてみると分かりました。

そういう認識が戦後になって少しずつ変化してくるわけですが、一部には現在でも、近世の琉球は薩摩の傀儡国家であるという認識をもっている研究者もいます。けれども私は、そのような見解には批判的です。傀儡国家、つまり他律的に薩摩によって操られていたという見方をするには、具体的、実証的にやらなければいけないわけですが、ここでは、個別のこまかい実証的な話ではなく、近世琉球の枠組みのようなものを考えてみたいと思います。現在の研究では、紙屋さんのご報告にもありましたように、「幕藩制の中の異国」というように、幕藩体制が琉球を異国としてそのまま包摂しているという見解、これが現在の近世琉球の位置付けでの大きな捉え方だろうと思います。

しかし、それは極端に言うとうと日本の側が琉球をどう位置付けていたかという半面でしかないと思います。つまり、逆に琉球側から日本や中国を見ると、どういうように位置付けられるか。そのことを琉球側は、沖縄の言葉で言えば「唐大和のお取り合い」という、中国と日本とのお取り合いをしてる。

お取り合い、ウトウイエーというのは、交際、外交を意味する用法でこのような認識を持っていた。そのことをもう少し敷衍するとこれは一種の二重朝貢、つまり二つの国への朝貢と位置付けることができると思います。

こういう二重朝貢という国は、実際いくつか類例があります。例えば、明代にあったシーサンパンナという国は、中国に対しても朝貢しますし、それからビルマ、現在のミャンマーに対しても朝貢します。研究論文を読むと、父なる中国、母なるビルマというふうな表現で、二重朝貢が位置付けられています。これはほとんど琉球の場合も同様です。日本と中国を父母の国と思え、というような認識が、近世の琉球で出てくるわけです。それだけではなくて、マラッカの場合も、シャムへの朝貢と中国への朝貢というのがあったり、それから朝鮮王朝も明清交替の直前まで、清朝の成立初期に、一期清朝によって制圧されて清朝へも朝貢をする、それから明朝へも朝貢するという二重朝貢の時代が短期間ですがありました。

このように二重朝貢という国家類型で位置付けると、近世琉球というのは、中国へのゆるやかな朝貢と薩摩藩に対する強い従属性という意味で、私は従属的二重朝貢として琉球を位置付けると当時の国際関係上の琉球の位置がよく分かるのではないかと思います。そのことは、例えば日本の側から見た場合、先程の紙屋さんのご報告にもありましたように、明清交替のときに、清朝によって琉球が弁髪を強制されるのではないかと恐れ、それは日本の恥になると考えていました。この論理は、琉球

を保護国としている体面上、琉球に悪しきことが起こると日本の恥になる。だから日本同然である、という言い方をしており、日本の幕府薩摩側からすれば、琉球を従属下においているという位置付けになるわけです。

もう少し広げて言えば、近世の日本というのは、小帝国としての幕藩制国家である、と位置付けるとよく分かります。中華帝国が非常に広くアジアを覆い、他民族や多くの国を帝国の下においていたわけですが、近世の日本も実は小規模ながら北の方ではエゾ地のアイヌを松前藩を通じて位置付け、そして南の方では薩摩藩を通じて琉球を位置付けています。その意味では、小帝国として存在したと考えることができます。

古代に目を転じると石母田正が言っているように、「東夷の小帝国」と古代日本をみる議論があります。つまり他民族支配との関わりで日本の古代国家を小帝国として位置づける考え方です。このような位置付けが中世日本を経て幕藩制の国家になったときに、琉球という異国を押さえ、そしてアイヌを押さえる。このことを近世の小帝国という形で、近世の日本を考えることができるのではないかと思うわけです。ですから、反対に琉球側から見れば二重朝貢、二つの国に外交をしている。その外交の従属度が日本との関係では強いと捉えれば、単純に「幕藩制の中の異国」という規定だけでは、琉球の半面しか押さえられていないというように思います。

それから、紙屋さんのご指摘に関連させて言えば、琉球側の主体性を問題に言った場合に、

主体性の根源は何かということが、もう一つ問題になると思います。これは、外交上中国との朝貢関係があるから日本の幕藩制の中に包摂できない、完全には組み込まれないということと同時に、やはり、中山王という領主権を持った存在であるということ。日本の領主、薩摩でも尾張でもいいのですが、近世の大名は個別領主権を持っていて、その個別領主権が一つの国、小さな国として存在していました。

そういう意味合いからすれば、琉球も小国として領主権を保持している。そういう個別領主権の観点から見ると完全に薩摩藩の中に全部組み込まれているわけではありません。琉球も中山王権という領主権を持つ存在として見ると、薩摩側は琉球攻略直後には、軍事的に強力に押さえ付けていますから、琉球側の主体性は当然押さえ込まれる。ところがそれがだんだん軍事的な直接支配から間接的なものへと変化してくると、琉球側の主体性が強く出てくる。こういう絡み合った形で個別領主権としての中山王というものを位置付ける方が、琉球側の主体性を考える場合には、一つのキーポイントになるのではないかと思います。

高良　今の豊見山さんから出された問題を、少し考えてみたいと思います。要するに、戦前から多くの研究者によって唱えられてきたように、日支両属、日中両属と言われてきたわけですが、近世琉球というものは政治的、外交的にどのような位置付けの国、あるいは地域であったのかという問題、議論についてです。実は、今日報告された紙屋さんは、近世日本を幕藩体制とか幕藩制と呼ばれる国

家論という大きな枠組みで捉えて、その中に琉球史の問題を位置付けてこられたオピニオンリーダーというか、議論を引っ張っておられる方です。その紙屋さんの一連の研究を吸収しながら、豊見山さんは紙屋さんと共通認識をもちながらも、近世琉球の性格規定の評価について新しいものの見方、新たな視点が必要ではないかということ forcefully 説かれたわけです。まずは、豊見山さんのコメントをお聞きになって、紙屋さんはどう思われたか、ちよつと展開してください。

紙屋 今豊見山さんがおっしゃったことというのは、私自身まだ十分考え切っていないところもあるわけですが、やはりこれから検討を進めていかなければならない、そういう問題だと思います。琉球というのは薩摩に対して従属的な二重朝貢をやっていた、そこから見て幕藩制国家というのは小帝国として考えたほうがいいのではないか。こういうご指摘があったわけですけれども、まさにそういう側面が一七一〇年の琉球使節の江戸上りのときに確認できるようになるわけです。

一七一〇年ですから尚益王の即位を感謝するということで、謝恩使が派遣されるわけです。謝恩使に関して幕府の老中から中山王に宛てた返書の中で、どういうふうに行っているかというところ、賢藩承襲集を告げんがために今回使節を江戸に派遣したと。つまり、琉球国王として即位したのでそのお礼のために江戸に使いを派遣されたということを、幕府として喜ぶという趣旨ですけれど、大事なところは、藩という言葉が使われているということ。藩国、あるいは蕃国という言葉が古代以来あります。日本は律令国家以来中国は隣国と呼んで、対等な関係の国というふうに行位置付けている。

一方、朝鮮半島にあった国は、藩国あるいは蕃国と呼んで、日本に朝貢させる相手として位置付けている。江戸幕府開設当初、幕府はそういう言葉は使っていなかったわけですが、一七一〇年の江戸上りのところで、琉球国の性格を藩国というふうに規定していくのではないかと。それが、新井白石が將軍を日本国王として位置付けていく。そして、その日本国王が治める日本に朝貢させる琉球ということで、藩という言葉を使ったのではないかと前から考えておりましたので、今の豊見山さんの従属的な朝貢関係という理解の仕方というのはよく理解できるわけです。

それと、主体性ということで今日お話ししたのは、薩摩が琉球を征服した直後というのは、あらゆる面で琉球を日本風に作り替えようという意図があったのかも知れません。しかしそれを、方針を変えていく。それは、日本が中国と国交を実現できないということが明確になってきた一六一五年です。そうになると、日本にとって中国との間をつないでくれる存在としては琉球しか考えられませんので、琉球と中国との関係を維持させるために、琉球の独自の政治を認める、独自の風俗を認めるという、そういう政策に転換していく。

それがまず確定されたのが一六二四年で、中山王に対して三司官以下の役人に対する扶持の給与権、それから裁判権、祭司権というのを認めるという形で、琉球の独自性というのを尊重するように変わっていった。やがて一六四四年に明が滅び清王朝が中国の支配者となって、その清王朝の国際秩序の中に琉球も組み込まれていく。その過程で日本側も随分揺れるわけですが、最終的な選択とい

うのは、やはり日本にとって中国との関係を考えて、琉球の存在というのは手放せないというところがありますので、一九五五年に琉球と中国の冊封・朝貢関係を認める。そして、その二年後に掟と出しているのを、薩摩が琉球に派遣する在番奉行に対して、琉球の内政に干渉することを禁ずるといふわけです。

そういう流れを見てみますと、琉球の主体性というのを認めざるを得ないような状況でずっと展開している。それをさらに表現したのが在番親方の制度だろうと思います。琉球在番奉行に対しては内政に干渉することは禁ずる。首里王府が鹿児島においた琉球仮屋（琉球館）、ここに一六六七年以降親方クラスの者を派遣して、薩摩との交渉事に当たらせる。その在番親方として派遣されるものは、『沖縄県史』の付録の説明によりますと、首里王府の物奉行を勤めたクラスの中から選ばれる。在番親方を勤めて帰ってくると、その中から三司官に昇進していく者がいるということで、かなり琉球側も重要な人物を薩摩に派遣して、薩摩の琉球統治に対応するというやり方を取っています。

在番奉行が乗り込んで来ていて直接琉球の内政に干渉していた、そういう段階から明清交替を経て、鹿児島島の琉球仮屋を通じての琉球統治へ変わっていくという形で、琉球の主体性というのが、薩摩によってある程度枠組みはあると思いますが、認められていく。そういうことが根柢になって、豊見山さんのご指摘は十分理解できるところがあると思っています。

高良 今の問題ですけれども、私が理解しているところでは、日中に所屬している近世の琉球とい

ったときに、中国や日本のはざまで、さまざまな位置付けとか性格付けがなされてきた、その辺のスペクトルというか非常に複雑な状況をどう考えるのかという際の一つのポイントは、当の琉球自身がおかれた実態は何で、豊見山さんが出された問題でいえば首里城に君臨した王がもっていた統治権とどうか、もっと分かりやすく言えば琉球側が自己に向かうときの主体的な力というのはどれほどのものかと考えるかということだと思います。

スミツさんの蔡温に関する報告でいえば、例えば蔡温という人物が従来平板に考えられていたものとは違って、彼の思想の内実を分析することによって、当時の琉球社会を為政者として経営する論理と言いますか、一種のオペレーションをどうしたのかという問題も当然出てくるだろうと思います。真栄平さんは、琉球の王権というか、豊見山さんがあえて使った言葉でいえば領主権、その問題についてはどうのように考えますか。

真栄平 いろいろな方々のお話を聞いていますと、非常に冊封体制とか朝貢体制とかを大きな視点から捉えようという議論があったと思いますけれども、私は琉球の主体性を考えるという場合にも、琉球の中に蓄えられてくる経済力がどれぐらいあったら、例えば薩摩あるいは中国との交渉の際、自立的な主張につながっていくのかという問題があると思います。近世の場合だと琉球の経済力を支えてきた商品というのは、ある意味では砂糖だと思いますが、その砂糖が琉球に導入されて、自前で作って外に売ると、それが一つの経済活力を生み出して、琉球の領主権や王権の強化にもつながってい

ったと思います。

と言うのは、例えば渡唐銀にしても、安良城さんがおっしゃったように砂糖の売り上げというものが伸びないと琉球の貿易資源である渡唐銀が手に入らない。銀と砂糖は相関関係にあるわけです。銀と砂糖という問題を絡めて言えば、琉球の自立性を王権のレベルで保障しているものやはり経済的な生産力だと思います。琉球には鉱山物、金銀銅といったものはありませんから、そういうものは輸入しなければならぬ。しかしそれを買うためには何かほかの物産を作り出すか、あるいは中継貿易でパワーをつけないといけない。それが琉球の自立性の経済的側面ではないかと考えています。

ですから高良さんが今おっしゃったような王権と自立性というものを、薩琉関係の政治的な側面から議論することも大切だと思いますけれども、一方においては経済的視点から見るとどうかという、それを例えば紙屋さんがおっしゃった一七一〇年に幕藩制から見た琉球の位置付けが変化していく、そのとき琉球の内部状況と言いますか、経済的な自立性はどこまで達成されていたのか、あるいは、まだ不十分な段階だったのか、というようなことも重要問題になってくるのではないのでしょうか。

高良 では関連しますので、スミツさんに近世琉球の主体性という問題についてうかがいます。先程は蔡温が独自に描いた琉球のビジョンの話をされましたけれども、例えば蔡温の思想や哲学を検討していて、今問題になっている近世琉球が持とうとした主体性と言いますか、琉球に対する直接的な管理者、経営者は琉球人であるという認識はあったのかどうか。あるいは、琉球人の責任において

ビジョンというものを作っていくという時、そういった問題に対する、蔡温の果たした役割についてはどうお考えになりますか。

スミツツ 近世琉球の主体性という問題はものすごく複雑なことです。今どうも現代的な国家とどのような何か思想的な力がものすごく強いと思います。というのは、近世あるいはそれ以前の、一つの国とかアイデンティティーを作るためには、現代的な概念とか国家ネーションという概念はほとんど無かったと思います。例えば蔡温の場合には、非常にもろい儒学思想をもって、それで琉球のアイデンティティー論を作って、そして論だけではなくて、それをある程度行政とか政策とかという分野で実現できました。

ですから蔡温の場合、儒学の歴史の中あるいは琉球史の中における一つの意義というのは、儒学思想を利用して、琉球国家論を作って、そしてその論によっていろいろな政策を作ったり、ある程度実現したということです。今まで東アジアの思想史の中の研究では、そういう面はあまり研究されていないようです。一つの蔡温の意義だと思います。

高良 梅木さんと田名さん、今論じられている琉球の主体論とか、それを取り巻く状況について、いろいろ複雑な問題を含んでいるでしょうけれども、ご意見を願います。

梅木 近世の琉球というのを、幕藩制論とか国家論といった観点から性格づけてアジア世界の中に位置付けようとするようなお話が進んでいるわけですが、私はそういった問題というのは、近世、

それから中国史でいうところの清代におけるアジア世界の全体的な問題ともかかわっていて、必ずしも日本の方の位置付けだけでは難しい問題を含んでいるのではないか、という気がしています。

そのことはさておきまして、琉球国王の王権の問題で、領主権という言葉が出てきているわけですが、私理解では領主というのは、言わば土地の支配者、そして日本史の研究のうえでいきますと在地領主、封建領主、いわゆる武士です。一所懸命の武士。土地支配というのが非常に本質的な意味をもっている武士社会。それを拡大した姿としての封建領主。そしてさらにその拡大したものとしての、先程ちよっとお話ししましたけれども後半の近世国家です。秀吉、戦国期以降の日本の国家の成り立ちです。そういったところで封建領主、領主権という言葉を考えているわけですが、そういった観点から沖縄の王というのは、やはり王権でありまして、封建領主とは全く性質を異にしているというふうに私自身は見ています。

と言いますのは、琉球国内における内部的な領主化の過程というのが、ほとんど見られないわけです。近世琉球の王、あるいは王を取り巻く官僚、官人、貴族層、これはあくまでも貴族制的な構造を持っているのではないかと思っております。その点が、先程言いました琉球というのが、日本を考えると非常に重要な示唆を与えるといえましょうか、意味を与えるということに関連します。逆にその琉球の内部構造がそういった封建領主的な世界とは違った貴族制的であるということ、それは、歴史的な発展段階からすると時間差であるのか、それとも違った方向への発展の可能性をもっていた

のか、その点のところは何とも言えませんが、逆に日本国内のアジア世界の中で特殊性というのを、むき出させているというような、そういった鏡になっていると思うわけです。

そういった構造のところに、近世以降日本の領主社会にできあがった国家支配の原理というのが持ち込まれてくるわけです。これがよく言われております石高制とか、あるいは身分制とか、あるいは鎖国制とか言われるようなものです。だからそういったものを導入したとしても、確かに琉球というのは石高制というのがある程度貫徹していきますし、それから身分制というのかなり偏差を見ながら、つまりかなり独自な形でありながら、身分制社会というのは確立されていくわけですが、絶えず二重構造が琉球の社会にはあるわけです。本来的な貴族制的な官僚制的な支配と、それから封建領主的な身分制的な支配というものの、これは二重性があるわけで、そのあたりがやはり日本を映し出す鏡になっている。そのことをやはり認識してほしいと思っています。

田名 近世の琉球王国の主体性のお話ですけども、琉球王国が自ら主体性を確立していく時期というのは、多分十七世紀の後半というふうに考えております。先程から紙屋さんがおっしゃっている一七一〇年という謝恩使の派遣の際の、それを受けての幕藩体制下の異国という話は、最終的な確認なのではないかと思っております。幕府とか薩摩が最終的に、琉球王国はそういう幕藩体制の中でも異国的な位置付けだということを確認した時期だろうと思います。

そういうことからしますと、琉球内部での主体性の確立と言いますか、それに向けての動きは、十七世紀の後半には動き出している。薩摩側の直接支配は実態はもう少し早くて、だんだん弱くなるというか、手放になってきて、琉球側に任せているという時期が一六〇〇年代の二〇年〜三〇年代から始まっていきますので、それを受ける形で琉球側でも、次第しだいに自前の近世国家を作っていくことになると思うわけです。時代的に見ますと明清交替が一六四〇年代にあつて、これは中国の動乱ですけれども、最終的に動乱が収まるのは清朝初期の三藩の乱が済んだ後ということになります。三藩の乱が済んだ後、中国では康熙帝の時代ですけれども、中国の清朝の一六七〇年代最も安定した時代が展開される。そういう十七世紀の後半、その時期にちょうど合わせるような形で琉球側でも接貢船の派遣なども始まっております。この時期は、基本的に日本全体も比較的安定していて、中国も安定した状況があつて、そういう中で琉球も、非常に安定した時代を過ごしているわけです。

そこで、琉球側では薩摩入りから百年は経ちませんが、一六八〇〜九〇年あたりから史書の編纂を行っていきます。たとえば『琉球国由来記』を編纂してみたり、『中山世譜』を作ったりとか、『碑文記』をまとめてみたり、『歴代宝案』もその時期にまとめられます。自らの歴史というのを、確認をしていくという作業がこの時期ずっと行われるわけです。一六九〇年代から一七〇〇年代の始めにかけて、そういう事業がずっと行われています。それは自らがたどってきた過去といえますか、歴史というのが何であつたのかということを確認する作業になったはずですよ。

『由来記』で沖縄全体のウタキを調査をしていく。どういう神様が祭られたウタキであるかというのを調査する。家譜の編纂も行われます。それは薩摩が入って来てからのことだけではなくて、古琉球以来の琉球の奉公人たちがどういうことをやってきたのかということ、改めて琉球人自らが確認をするということに、結果的につながるわけです。さらには『世譜』にも、後々の『球陽』などにも影響を与えています。結果として身分制の成立にもつながっていく話になります。

琉球が安定した時代、薩摩の直接的な支配も緩んで、基本的には琉球側に任されている、貿易も順調、経済もまあまあというような時代、その時期は琉球が、琉球王国として、自分たちの位置を確認する時代なのです。中国と日本との間で小さな国である琉球が、どう生きていくべきかというのを、過去を学びながら、史書を編纂しながら、一つの形ができあがっていく。そこで最後に登場するのが、蔡温という気がします。蔡温が最終的に総まとめをした。琉球王国はこういう国なんだと。日本はこういう国で、中国はこういう国で、そういう中で我々はどう生きていくべきかというのを、最終的にまとめて結論を出したのが、蔡温だったというふうに思っています。

高良 今の問題に関連して言いたいのですが、田名さんが指摘されたように、近世に入り琉球で歴史の本や由来記の類を編纂して、琉球人たちが自分たちの歴史を語りまとめて、それで自分たちのアイデンティティとかイメージを再構築するという時期があるわけです。大事なことの一つは、最近つくづく思うのですが、実はそれは奄美を外して行われたという問題があるわけです。

つまり、奄美地域との従来のかかわりというのを基本的に捨象する形で、近世琉球の自己アイデンティティみたいなものを歴史像として作ってしまった。奄美を外すことによって行われた琉球の自己確認というものが、いったいどのような意味を持っていたのかということが、当然問われるべきだと思うのですが。

もう一つ、これは豊見山さんにお聞きしたいのですが、例えば、我々のように主として前近代史という古い時代のことをやっている者の目からすると、従来行われてきた琉球処分、沖縄県設置をめぐる問題についての研究に一つの疑問がある。琉球処分については今でも議論されているわけですが、でも、どうしても残る疑問は、琉球処分で互解した近世の王国体制、つまり否定されたものの性格をどう考えるかということです。そこをちゃんと評価しないことには、琉球処分の評価もできないというふうに私は考えています。そのあたりについて豊見山さんの意見をお聞きしたいと思います。

豊見山 私が「両属論」は非常に問題があると思ったのは、両属という概念自体が「琉球処分」のころから出てくることによります。幕末の江戸幕府の琉球認識では、琉球はいつたどこに所属するのかということを、ペリーが来たときに大問題にするのです。その結果日本にも従属しているし、中国にも従属している。だから、「両国随従の国」としか言いようがないと言って、両属とは言っていない。両方の国に随従して存立している国として琉球を幕末の老中たちは認識していたわけです。

ところが琉球処分官の松田道之の議論では、琉球は両属しているからけしからんという形で、両属

という用語を使用しています。中国に属しているのか、あるいは日本に属しているのか、あいまいな状況はけしからんから日本に全部専属せよと主張しています。それに対して首里王府の側も、その明治政府の言葉を逆に使って、両属がけしからんというのはおかしい。世界のほかの国をみれば両属もあるし、三属もある。こういう形で反論をするわけですが、結局近代の国家観や領土観、あるいは近代国際法の観念からすると、琉球のような二重朝貢国家というのは否定されるべきものとして位置づけられてしまいます。そして明治政府によって琉球の二重朝貢という国家形態は強制的に消滅させられた。このように、両属という言い方はどちらの国に属するかという、宗主国の上からの所属論になってしまう。ですから両属という概念を洗い直す必要があります。

つまり、前近代を見る場合には、前近代に即した国家の考え方であるとか、領土論の認識方法が必要だと思います。両方の国に仕えていることに対しても、それが矛盾なく日本の幕藩制の中に組み込まれ、それ以上に中華帝国はゆるやかな形で琉球を包摂していました。こういう国際関係のあり方を見るとときには、近代的な目ではなくて、前近代に即した世界秩序から位置付けたときに、琉球という国家も前近代の国家の一つの類型として考えられると思います。そのことのほうが、より有効な近世琉球論になるのではないか。そういうことを考えています。

高良 近世琉球を全体としてどう考えていくかということを議論してきましたが、このテーマについてどうしても言っておきたいという方はいらっしゃるでしょうか。

紙屋

近世における対馬藩の位置付けというのが、そういう豊見山さんのおっしゃりたい従属的な朝貢という問題を考える一つの材料になるわけです。対馬藩ということで、将軍から大名として認知されているわけですが、対馬藩の宗氏というのは、朝鮮王朝へ貿易を行っている。しかしその関係というのは、朝鮮の釜山において、倭館というところにおいて朝貢的な儀礼を強要される。そのことをもって幕府が対馬藩の朝鮮貿易を差し止めたということはないわけであって、そういうことを考えると、従属的な朝貢という形で対馬が日本と朝鮮との間に入って、江戸時代の日朝関係を円滑に進めていったという、そういう側面は言えると思います。

それと、これはあまり関係ないわけですが、やはり近世の東アジアの中の琉球ということを考える場合に、明清交替ということは視野に入ってくるわけです。その清王朝というのが女真族、後の満州族によって立てられた国である。こういう東アジアの中で漢民族の明王朝が滅亡して、明王朝からみれば夷狄である女真族の国家が中国を支配していく。そのことが周辺の朝鮮あるいは日本とかに与えた影響というのはすごいものがあつた。そういう明清交替という歴史を背景にして、日本は特に清王朝のことを韃靼という言葉で脅威に思っておりますので、その韃靼と言われた清王朝が東アジアを支配していく。それが周辺の国々、特に日本にどういう危機感を与えたか。そういう背景の中に日本の琉球に対する統治のあり方というのは関係してくるのではないかということ。韃靼ということ視点の一つとして入れて、東アジアの中の琉球ということを考えていく必要があるのではないかと思います。

います。

高良 実は会場からいくつか質問をいただいております。時間の関係がありますので全部取り上げることはできませんが、アマンドさんに対する質問を紹介したいと思います。台湾の俗に高砂族、高山族と呼ばれている方々の織物と、琉球との関係について、ご存じでしたら教えていただけませんかということですが。

アマンド 申し訳ありませんが、私はあまり台湾のことを研究していません。いわゆる紋織は、部分的には琉球の染織品に出ていますけれども、あまり広くはされていなくて、尚家関係の衣装には入っていたり、さつきちよつと触れた読谷村の紋織、読谷ミンサーとか、そういうところに出ています。台湾のことに全然詳しくありませんけれども、そういう複雑な織構造が主な染織の要素になると思いますので、琉球の染織、そして八重山の染織でどういう関係があるか、まだ私は全然分かっていません。

高良 もう一つだけ紹介しますが、これは真栄平さんに対する質問です。近世後期に入って流通とどうか中国との朝貢貿易について変化が見られるという話ですが、その場合に例えば本土では十三湊とか堺とか、いろいろな商業港がにぎわってきます。那覇だけではなくて、琉球の各地においてもそのような商業港的ないろいろな展開が見られなかったのはどうしてでしょうか、という質問です。

真栄平 琉球に日本本土でいうようないわゆる商人階層がいつ頃から生まれてくるかという問題が、

流通の問題に大きくかわると思います。流通が発達しないと港の形成や維持というのはなかなか難しいと思います。それで、先程ちよつと言いましたけれども、琉球の自立性という問題は政治的な問題であると同時に、もう一つは経済的に自立していく中で、商人階層が成長してくる。そして宮古八重山まで含めた広域的な商業ネットワーク・流通網が形成され、港も栄えるということだと思います。

ただ、近世の琉球と薩摩の関係で言いますと、いろいろな商品や物産を琉球域内で動かしているのは、近世前期の十七世紀段階では大和船頭といわれる鹿児島から来た商人たちです。それが十八世紀ぐらいから琉球の商人、特に那覇の商人が中心になって、物流を担っていくという。ですから、日本の商人と琉球の在来商人との対抗関係という問題が絡んでくると思います。だから、それを琉球域内の広域ネットワークで考えると、十九世紀にならないと、琉球の中での商人的階層というのは、なかなか全面開化といえますか、発達してないというイメージを私は持っています。

高良 例えば、先程の報告で出されたお茶だとか鉄の針だとか、要するに琉球の住民たちのほうで消費されていくものはどうですか。

真栄平 あのデータは十九世紀ですから、私の言う在来の商人が出てきた段階にあたります。したがって、白砂糖やお茶や鉄針などを運んでいるのは、琉球商人でしょう。おそらく那覇を拠点にした民間海運業者が登場してくるというイメージを持っています。

高良 田名さんにお聞きしますが、琉球域内の海上交通だとか商取引のネットワークの拠点は那覇

だと思いますが、那覇はもちろん進貢貿易、朝貢貿易の拠点です。そのほかにそれを支える民間貿易もあり、真栄平さんが出されたような問題を含めて那覇についてどういうイメージで考えたらいいのでしょうか。

田名 進貢貿易、朝貢貿易は中国相手ですけれども、基本的に那覇の港というのは大和船が結構多いわけです。大和の船が入って、年貢などを持っていくだけでなく、さまざまなものを持ち込む。それを琉球国内といいますか、域内に運ぶのは琉球の船、地元の人という形になるでしょう。沖縄では基本的には町人層というのは存在せず、町百姓から一気に士族になってしまいますので、地元の商人という言い方は必ずしも正確でないところがありますけれども、金をためて、それなりの経営をやるような人間というのは、大概王府に献金するなどの方法で侍身分を買うような形で士族に上昇していきますので、実際にはほとんど士族層がやっているというように思います。後は進貢船の船頭というのはいますけれども。ですから那覇の港の状況というのは商人層が抱えている宮古八重山あたりの周辺離島に行くような船と、薩摩の船が行に来する、というようなイメージが一番大きいのではないのでしょうか。もちろん王府の廻船などもありますけれども。

高良 今の問題は重要な問題ですから、もう少し議論していただきたいと思います。例えば福州、那覇、鹿児島というルートでの商品流通を考えれば、真栄平さんが紹介した中国に残る当時の清単文書というリストを使って、琉球が何を福州で購入したかという状況は分かるわけです。それは当然朝

貢貿易というオフィシャルな公的なルートにぶら下がったものであり、その状況を支える進貢船に乗っている琉球の船乗りたちがいた。断片的な資料で知られているように、鹿児島商人たちがいくつかのコネクションを使って、東シナ海を越えていく琉球の船乗りにある種の品の買い付けを託している。そういう意味で、福州、那覇、鹿児島というルートは、公的なつまり表の文書に現れる世界以外に、それにぶら下がっているたくさんの民間活力というか、私貿易や密貿易すれすれの問題も、多分含まれていると思います。ですから、三地点をつなぐルートはもうちよつと幅広い問題として考えたほうがいいような気がします。

例えば、先程出たお茶の問題は、琉球の中で消費されるほかに、民間型というか、表面は公的な顔をしているけれども、もう少し緩やかな広い流通に乗っかっているような問題としてとらえていく必要があると思います。大和船という鹿児島商人たちの船を使って、鹿児島経由で日本市場に流れていく問題もあるでしょう。そのあたりの展望はどのようにお考えでしょうか。

真栄平 今日私報告における問題意識というのは、貿易というのを内側の社会と接点を持って考えるということです。つまり貿易は外の関係ですけども、それを内部世界とリンクして考えるとどうなるか。それで日常生活品のお茶や針に注目したわけです。今日の話では全く触れることができませんでしたが、実は琉球から中国へ輸出するものは、日本の海産物。特に昆布とかフカヒレとか、北海道からずっと下関を経由して、薩摩、そして琉球へ入っていくという日本と結びついた物流

構造があるわけです。それを琉球側の商人と言っているのか分かりませんが、進貢貿易とドッキングした、高良さんの表現でいえば下がつている民間の人々が、海産物貿易にも深く関与していて、那覇に設置された昆布座を舞台にした昆布の取引をしている。

そして、これが進貢貿易とリンクし、中国へ海産物を輸出していく。その見返りに大量の中国産物が入ってくるという形になっていると思います。ですから、日本と琉球と中国をつなげて考えると、民間の活力と言いますか、そういう物流の担い手論というのは欠かせないわけです。

そしてもう一つ今日お話したかったのは、いろいろな中国産物が入ってきてそれが消費されるわけですが、その消費の主体です。琉球の中で十九世紀にはある一定の消費社会ができていると思います。それは言ってみれば、那覇という町の都市的な発展と不可分だと思いますが、そういう内部的な歴史の発展。古琉球みたいに中継貿易で東南アジアからのものをいろいろなところに流していく通過点ではなくて、内部でも消費しているという社会構造です。一定の消費型社会への歩みが根底にあって、それと物流の歴史的発展が絡まりあって、琉球域内の経済圏が、この時代はかなり活性化してくるのではないだろうか、そういうイメージを持っています。

高良 アマンドさんの報告について大変興味深く聴いたのですが、問題は絣というものが、東南アジアあたりでは儀式とか儀礼と深くかかわっているが、八重山あたりに残っている絣は、形態としても、絣の意味付けとしても、東南アジアとの深い交流とか影響のようなものを考えなければならぬ

ということを指摘されていた。そうすると、近世以前の古琉球において東南アジアとの交流があったことはいいわけですが、古琉球だけの話に問題を閉じ込めてしまうのではなくて、もしかして近世に入ってもなんらかの形で東南アジアとの交流が、影響関係があるというふうに聞いたのですが、その趣旨について、アマンダさんに確認したいと思います。

アマンダ 仕組みの一つの問題は、近世という枠組みにこだわると、外のいろいろな条件を無視することになって、東南アジアとの関係は、古琉球にあったことはもう分かっていますけれども、絣との関係としては、近世琉球時代にもあったかも知れませんが、その後の、明治の沖縄の時代にあった交流によってできたかも知れません。ですから、今琉球のもの、沖縄の伝統的なものが、どれだけ古く逆上れるか、そういう概念ももうちょっと把握する必要があると思います。今現在古くからあったと思っていても、明治とか大正ごろの沖縄で初めて起こった現象かも知れません。ですから、近世時代にこだわらなくて、やはり一つの流れとしてずっと現在まで見ないと、何かを無視する可能性が多いのではないかと思います。

高良 梅木さんは太平布・上布の歴史的背景について論文を書いています。今のアマンダさんの問題提起はどうですか。

梅木 絣が琉球へ伝わった時間と言いましようか、あるいは近世においても東南アジアからの伝来があったのかなかったのか。そのあたりはあまりよく分らないです。けれども先程申しました、琉

琉球における布の生産というのが、十六世紀ごろのアジア世界の大きな変化、進貢貿易、冊封制も大きく変わってくる。その中で内部的に刺激されて、かなり布の生産が増大したということ。それと、島津の琉球侵入の際に、まず申し付けているのが布です。その布の重要性というのを、日本のほうでも既に知っていたわけで、大量の布を沖繩に申し付けているわけです。だから、この布というのが近世の琉球にとっての非常に重要な生産物であって、しかもそれが日本にとっても重要な、たぶん日本の領主階級にとっても重要なものであったということが分かるわけです。

それを、恒常的に薩摩は琉球から得ようとしていくわけです。先程アマダさんのご報告の中に、島津侵入以降、八重山に布の緋の工房を設置したというお話があったのですが、その点について私はよく存じておりませんので、お聞きしたいようなことです。恒常的になるということは、やはり生産の仕方というのがある程度体制化してくるわけで、それが八重山における人頭税との関係になっていると思います。逆に言う人頭税というのは、布の生産、そしてその布を島津が御用布として徴するということと、非常に深く結び付いている問題だと思っております。

その中で、やはり薩摩からいろいろな注文が出されております。これは八重山の『参遣状』（喜舎家文書）などを見ていきますと、注文がいろいろな形で出ております。例えば、柄についての注文です。格子、あるいは崩し格子とか。それから、緋という言葉も出てきます。これは十八世紀の初めにそういった言葉が出てきています。緋という言葉の、史料のうえでの出現としては、早いほうではないか

と思います。こういった柄だけではなくて、例えば一八升とか二〇升とか、これは布の精巧さを表しているのだと思います。そういったものが作られるようになっていく様子が、逆にそういった島津の御用布申し付けの史料の中から読み取ることができるわけです。

そして、この琉球の布は、御用布として申し付けられる一方、琉球王府のほうも言ってみれば贈答品として、これを申し付けているわけです。日本の市場のほうに出回ってくるわけです。どういう経路で出てくるかは分かりませんが、ちよつと押さえていないのですが、やはり江戸や大坂の商人の手に入って、これが市場に出てきているようです。そのとき名前が「薩摩上布」という形になっているわけです。十九世紀になりますと、「越後上布」「新潟のほうで上布が作られます。越後縮という有名な布がある——こう言った「越後上布」と「薩摩上布」というのが、江戸・大坂の市場で「番付」の上位に絶えず位置付けられている状態というのが出現しております。

「番付」というのは当時好んで作られたもので、この場合産物の番付です。大関になっているのが、松前の昆布とか、土佐の鯉節とか、出羽の紅花とか、それから阿波の藍とか、そういったものがありますけれども、それと並んで薩摩上布とそれから越後上布というのが、関脇か前頭ぐらいに位置付けられている。それくらい沖繩の布というのは大きな意味を、日本の社会で発揮していたわけです。しかしその根本のところの八重山のことは、ちよつと見えなくなっているというところがありますけれども。そういったことがあって、紺とか柄などは、そういった中で注文を受けながら、八重山の女性

たちのそれこそ気も狂わんような集中力の中で生まれてきたのではないかと私は思っています。

アマンダ 梅木先生がおっしゃった人頭税とか御用布の注文とかは、公向きの布生産、染織生産で、今日お話ししたある特定の絣模様が入っているもの、つまりミンサー帯とかティサージとかは、それこそそういう人頭税制とは関係なしにできたらしいのです。ティサージも含めて、人頭税制とか御用布とか御用布のモデルになる御絵図とは、全く違った系統からできたらしいということしか今は言えません。御用布とか人頭税制のもとでできた絣模様は、また東南アジアと別なルートから、首里、沖縄本島、それに宮古と八重山に入ったかも知れません。八重山に絣があつたといつて、必ずしも全部同じ源流から八重山に入つたとは限らないと思います。

ですので、今日は公的なものではなくて、もっと個人的な儀式だとか村の儀礼とか、そういうもつと私的（個人や家に係わる）場面で使われたものに、ちよつと目を向けていただきたいと思います。先お話しました。東南アジアとの関係は、御用布としてできた絣とは関係ない可能性もあります。先程高良さんのご質問に対してもお話ししましたように、必ずしも古琉球、近世時代の東南アジアとの交流から八重山に入つたとは言えなくて、やはり明治、大正、昭和時代の沖縄の出来事なのかも知れませんので、ちよつと区別をつけたいと思います。

豊見山 衣服、布のことが議論になっていきますので関連してお話ししたいと思います。紙屋さんの講演の中で、一七二〇年以降に琉球使節に中国衣装を強制したという議論。これは戦前以来の見解で

す。私もその史料を何度も読んでいますけれども、この位置付けは大変微妙な問題があるのではないかと思います。中国服を着けるのは突然この時期から始まるわけではなくて、琉球使節はそれ以前から、中国の官服を着けたり、琉球の官服を着けるなど、両方使い分けながら江戸上りをやっているわけですね。

この時期に薩摩がなぜ中国服に対して強く強制的に見えるような文書を残しているかといった場合の在り方を考えると、それ以前に琉球側は、一六八〇年から一七一〇年代にかけては、かなり強い中国指向を持つようになります。イデオロギー的にも、琉球社会の中でも中国指向というのを打ち出してくる。そういうものが衣服の問題にも絡んでいると思います。薩摩側の文書を読むときに、他の場合もそうでしょうが、一方的あるいは命令文書に見えるものが、よくよく他のものと突き合わせて見ると、琉球側が申請したものを、薩摩がそれを許可する、命令して許可するという形式の文書がかなりあります。

そうすると、後半部分の薩摩の命令・許可だけが残っていて、琉球側が申請した部分が残っていないと、あたかも薩摩が一方的に命令を下しているというような解釈に陥りかねないのではないかと。実際、琉球は中国官服、中国装束を強制されたと解釈すると十分説明がつかない問題があります。つまり、琉球側は中国装束をいやがったかという点、むしろ逆です。中国衣服をつけることによって、琉球の位置付けをアピールしています。そのことは、北の松前から通じて入ってくる蝦夷錦というアイ

ヌを通じての衣服、つまり清朝の役人の官服が、日本で珍重されていました。

他方、冊封関係で清朝から琉球国王に与えられた蟒緞を、琉球側は明服様式に仕立て上げて、琉球国王の王権の、一つの見える形のレガリアというか象徴物のような形で着用していました。

そういう大勢の中で中国衣服というものが、強制されたものではなくて、むしろステータスシンボルとしては高いものという当時の意識を、もう少し考える必要があるのではないかと思っています。付け加えると、清代になって東アジアは、中華中毒というか、大変中国に対するあこがれが強くなります。朝鮮の場合もイデオロギー的に儒教というのを深く受容し、江戸幕府や諸藩も儒教イデオロギ―を積極的に受容しようとする。琉球も、ベトナムもそうです。ということになると、中国を中心とした儒教文化圏の中に琉球が参入する意味合いを考えると、単純に中国的なことを強制されたと言えるのかどうか、もう少し検討の余地があるのではないかと私は思います。

高良 今日、アメリカからスミツさんとアマンガさんのお二方をゲストとして迎えています。

スミツさんは来年の三月にハワイ大学出版会から蔡温に関する一冊の本をお出しになる予定だと聞いています。外国で近世琉球をテーマに研究するということの難しさは、我々が想像する以上のものだろうと思います。近世琉球史の研究、あるいは広く沖縄研究と言った場合に、沖縄の我々や日本の我々が外国の研究者のためにサポートできる点は何でしょうか。我々に対する注文でもいいですし、これから研究したい夢というかビジョンでもいいです。最後にお二人にぜひそのことについて、少し

コメントしていただきたいと思います。その後、ほかの先生方にも今後近世琉球を考えていくポイントを一言ずつ指摘していただいて討論を終わりたいと思います。

スミッツ

先生方のお話をお聞きしまして、大変勉強になりました。いろいろな考えが出てきましたので。

近世琉球の主体性という難しい問題についてですが、一つの見方は、近世日本でも中国でも、近世のアジア、東アジア全体では、位置ということが非常に大切でした。今抽象的な概念として位置という単語を使っているのですが、具体的な例をいくつか挙げれば、神道という宗教の名前です。近世には神道という言葉は、別に特定の宗教を指すわけではなく、根本的な意味は地元の宗教です。『琉球神道記』という本があります。日本からきた仏教の僧が、人類学者として琉球の宗教を観察して、それについて書いているものです。つまり、琉球の地元の宗教という意味の本です。しかし現代になると、神道というのは、そういう相対的な意味がだんだんなくなって、絶対的な意味になりました。その意味は、日本の伝統的な、ずっと大昔から今でも続いてきた、民族の宗教というようなものになりました。つまり、近世には相対的な意味があつて、そして現代に入ったら絶対化されてきたのです。

あるいは、国や国家は、近世にはそれは藩という意味の場合が多かったわけです。特に、地元の一つの藩の書類を見たら国家や国や国土という単語がよく出てきて、それは多くの場合はそれを指します。幕府がそういう言葉を使ったら、幕府あるいは幕府の領域、直領という可能性もあったし、あるいは豊見山先生がおっしゃったように小さな帝国としての日本の全体という可能性もありました。つ

まり、とてもあいまいで、あるいは相対的な単語です。しかし、明治時代に入ったら絶対的になりました。

その過程の中で、琉球が存在しました。近世琉球はあいまいです。確かにあいまいなところでした。というのは、多分、非常にはつきりと具体的に琉球はこういうところだったとは、言えないかもしれません。近世琉球だけでなく、一つの近世の特徴は、こういうあいまいさが普通でした。はつきりしていないところがたくさんあったということです。しかし、明治時代になれば、日本と中国とかはその国境つまり国家のあらゆる次元が絶対的になってしまったけれども、琉球沖縄の場合は、つまり沖縄県それほど絶対化しやすいところではなくて、旧慣温存という初めての政策の中での沖縄は、日本帝国の最初の植民地みたいなところになってしまいました。

ですから、近世琉球を考えましたら、あるいは近世日本、近世の清国中国とかは、やはりあいまいで相対的な位置にあります。あるいは外交の場合は礼、国の上と下との関係などの特徴があった。今はそういうような何か中途半端ですけど、そういうモデルを考えています。

アマンダ アメリカ、もっと広く外国で、琉球や沖縄のことを研究する難しさという課題を与えられたのですけれども、現代や戦後の歴史とか、戦後の文学の専門家としては、例えば文学の場合は占領時代の文学とか、歴史でも占領時代の歴史、経済、政治体制は、占領ということとか植民地ということとかそういうテーマが非常に人気があつて、その人気に乗って、そのテーマを沖縄琉球にわりあ

いに持つて来やすいと思います。そういう意味では、例えば、マイケル・モラスキーさんとかステイヴ・ラブソンさんは、日本現代文学の枠の中で十分沖縄の文学も論じることができていると思います。

前近代になりますと、つまり近世とか近世以前の歴史でも文学でも思想でも、ヨーロッパは知りませんけれども、アメリカの学界では、非常に縮んできた分野なのです。その中にもっと狭く琉球を、ということにしますと、やはり日本研究から見たら狭い研究だと見なしていると思います。そういう意味では、近世琉球の研究は非常に進めにくいのです。

そのためにこそ、私はどうしても琉球の染織の歴史を研究したいと、熱心に思っております。美術館の学芸員になったり、大学の先生になったりすると、そういうことは全くできなくなると思います。大学の場合は、私の資格では例えば日本美術史とか日本古典文学とか、そういう分野で採用されることができたかもしれませんが、その中で琉球のことを研究するのはとても無理だったはずです。そのために今のような、フリーの形でできるだけ琉球の研究を進めたいと思います。

でもその反面、一〇年前と比べたら、基地の問題のお陰だということもあると思いますが、沖縄に對しての意識は、前よりかなり高くなって広がっていますので、持続する就職とかいうことではなくて、イベントだとか本だとか、何か研究の成果があつたらとても目を引くことになると思います。

豊見山　私は歴研大会の一九八六年以来、近世の琉球の主体性というものの内実をあれこれ考えて

きましたが、今日はいろいろな方々の御意見が聞けて大いに学ぶところがありました。今後も政治外交の論理と琉球側の主体性のあり方をなお追求していきたいと思います。

田名 個人的には引き続き、近世の琉球王国、古琉球も含めての話になりますけれども、その内実を明らかにしていきたいと思っております。また、一番身近なところでは、今日出るのかと思ったのですけれども、漂着とか送還とかに関わる問題を研究していきたいと思っております。漂着漂流は、ある意味では、琉球が直接的に中国、朝鮮あるいは日本の各藩とのかかわりを持つことになります。その関わりというか、関係の中で漂着、送還の実態も明らかにとなると考えています。よく漂流送還システムということを多くの方が言及なさってますけれども、規定だけの世界ではなく、具体的なところでは、もう少しいろいろありそうな感じがしているものですから、そのあたりを少し探って見たいというふうに思っております。

梅木 私は、冊封ということについて、ずっと関心を持ち続けたいと思っております。自分ではちょっと歯が立たない領域ですので、研究の進展をいろいろ見守りながら学ばせていただきたいと思っております。それと、鹿児島に住むようになりまして、鹿児島のことをもう少し研究してみたいと思っております。といいますのは、近世琉球といいますのは、薩摩藩のこととかなりつながっている。連動している部分があるわけです。例えば地頭という言葉にしても、あるいは評定所という言葉にしても、非常に薩摩藩政的な言葉です。そういった問題は、逆に薩摩のほうでも、薩摩における地頭制―これ

は鎌倉時代の地頭制とは違った戦国時代的な地頭制。島津氏の家臣団編成、戦国時代の制度ですけれども――そういったものの比較と言いましょるか、関係を研究していけたらと思つているところです。

真栄平　私は、進貢貿易を取り上げましたけれども、さらに実態分析を積み重ねながらを物流と人間の姿がもつと見えるような方向で議論を深めていきたいと思つています。先程田名さんがコメントしてくださった中に、進貢貿易論が抽象的な総論の時代から、各論個別的な実態分析の方向へと、というようなお話がありましたけれども、そういう方向で、具体的なものを通じてものに語らせる形で、人間の歴史が見えるという研究視点をさらに深く考えていきたいと思つています。

アマンダ　やはり、真栄平さんが今おっしゃった実態ですとか、体制ですとか、物質文化を研究することによつて、もつと日常的なことを研究したいと思つています。その中に、今日と同じように先島に絞つて、一方の公向けの人頭税の染織生産と、片一方は今日お話ししたようなことで、もつと個人的な布の使い方とか作り方とか、需要と消費という二つの面から先島の布をもつと見つめていきたいと思つています。

スミッツ　琉球の研究を進めるためには、やはりこういう「アジアの中の琉球」という視野が必要です。アメリカの日本史の学者は、ただ琉球だけについて話したり書いたりすることならばそんなに興味を示さないかもしれません。しかし、もし琉球と外のところとのつながりを示せば、多くは興味を持ちはじめると思つています。ですからこういうふうに、できるだけ世界の中、アジアの中の琉球とい

うふうな見方を持って研究すれば、ほかの分野の学者も層興味を持つかも知れません。今、確かに琉球はアメリカの学界の中で話題になってきました。ですから、アメリカでも琉球の研究はさらに盛んになると思います。

紙屋 近世琉球の対外関係ということで議論していくと、どうしても中国との関係、あるいは日本との関係ということと止まってしまう恐れもあるわけですが、幕府が打ち出す対外政策の中で、北の蝦夷地に対する政策と、琉球に対する政策は、やはり中国大陆の動きを視野に入れて、並行して同時的に出てきますので、そういう広がりの中で近世琉球を考える必要があります。そして、東南アジアとの関係、古琉球はそうですね。近世琉球に入つての東南アジアとの関係というのは、直接的には目に見えてこないわけですが、江戸幕府はいわゆる鎖国を行っていますけれども、東南アジアとの関係というのはものすごく重要視しているわけです。

東南アジアの情報、産物を入手するために、中国船を奥船―東南アジアを奥国と呼んでいますけれども、奥国を指向してくる中国船、それを奥船、それから中国本土から直接長崎にやってくる中国船を口船と呼んでいます。奥船を通じての東南アジアとの関係を重視している。当然その過程で、近世琉球というのは、福州とかでそういう東南アジアからやってきた中国船と、あるいはそういう人達と接触する機会もあったはずですよ。ということ、もう少し視野を広げていく必要があるのではないかと、うふうに思っています。

数年前に「北京の琉球使節」という題目で論文を書いたことがあります。北京に赴いた琉球の使節たちは、極めていろいろな国の使臣たちと交流していました。特に記録に出てくるところでは、朝鮮が出てくるわけですが、『中山世譜』を見ていきますと、中国の皇帝への行幸の場で、朝鮮、安南、ビルマ、ラオス、ネパールといった、いろいろな国の使節たちと一緒に行動している。そういうことで近世の琉球というのは、もっと北京を舞台にしているいろいろな国の使臣たちと交流する機会があったというふうに思っています。そういう方面でさらに研究していくと、単に琉球と中国、琉球と日本ということだけでなく、アジアの中の琉球というのが、また見えてくるのではないかと思つて、そういう研究をやりたいと思つています。

高良 長時間にわたつて報告、討論に参加していただきました先生方に感謝したいと思います。それから会場の皆様にも熱心に聞いていただいたことに感謝したいと思います。最後にこのシンポジウムを主催していただきました法政大学沖縄文化研究所、共催の琉球新報社に感謝したいと思います。

なお、法政大学沖縄文化研究所におかれましては、今後ますます沖縄研究の東京での拠点としての役割を果たされ、今日話題になったような近世史の問題等についても、勉強会ですとか資料集の出版ですとかについてバックアップやコーディネーターのお仕事をやっていただきたいと希望しまして、第二部を終わりたいを思います。